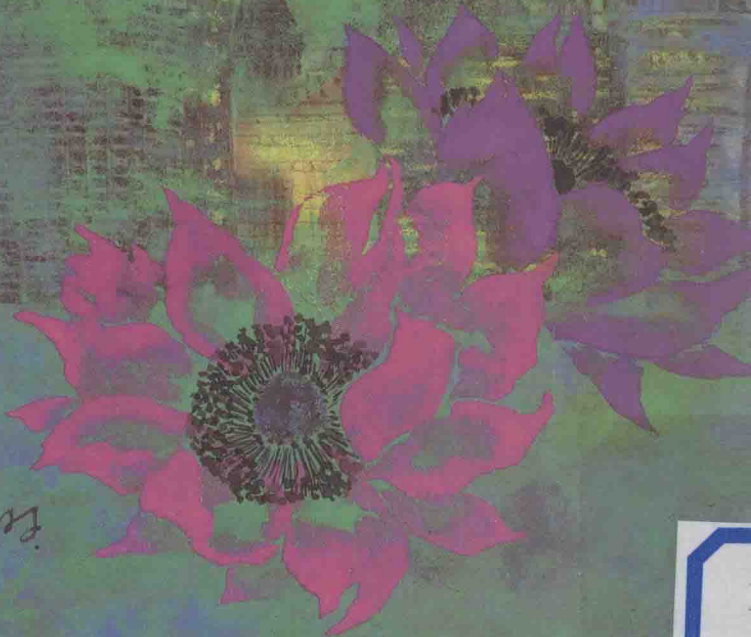




離情

田地文子



集英社文



集英社文庫

離 情

昭和59年2月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 田 地 文 子

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋 2-5 10
〒101

電話 東京 (238) 2842 (編集)
(230) 6171 (販売)

印 刷 大日本印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© F. Enchi 1984

Printed in Japan

ISBN4-08-750715-7 C0193

集英社文庫

離 情

円地文子



集英社版

離 情

「お父さま、まだ一時半にはなりませんわね」

重ね簞笥たんすの開きの前に立って、薄色の訪問着を両手に掬すくい上げながら、節子は隣間の縁の藤椅子で新聞をよんでいるらしい夫の元衛に声をかけた。

「まだ半にはならん……二十分、いや、この時計はたしか二、三分進んでいるから、正確には十七、八分というところだろうな」

「そう……じゃあまだ時間があるわね」

節子はうっかり言ってから、夫に向ける言葉使いがこの頃だんだんぞんざいになってきたのに気づいて、ひやりとした。元衛が××県の知事を務めたり、そのあと一度保守政党から代議士に選出されたりしていた数年前には、決して、「そう」などという言葉で夫に応対したこともなかったし、そんな口のきき方でもすれば、山陰の旧家の出を自慢にしている元衛は必ず露骨に不機嫌な顔になったものである。

「披露は何時からあるのだ」

元衛は節子の自責など一向気にしていないらしく、襖越ふすまこししに話しかけてきたが、節子には昔のように言葉使いや行儀作法をやかましく言わなくなった夫の心身の衰えようが却かえっ

て身に^{ふた}応えた。

「御披露は三時からですけど、精一さん達が二時に迎えに来てくれるって言いますから……」

「椿山荘だったね。三時からすると、すむのは五時半かな」

「ええ、何でも六時過ぎの汽車で熱海^{あたみ}へ発つんだそうですわ」

節子は訪問着の肩の方を膝^{ひざ}の上にのせて、衿^{えり}の綴^{とど}じ糸を引きながら言った。これも夫の代議士時代に宮中の園遊会に招待された時新調したもので、今の年齢^{とし}にしては模様の派手なのが気になる。たまにしか手を通さないので折目皺^{しわ}も強く眼立^{めだち}っていたが、アイロンを当てる暇はなかった。節子は衿を綴じながら自分の着物よりも、その上に載せてあったために、今簞笥から取り出して、衣裳^{じふさ}莫^も産^{さん}の上に、重なっている娘の茉莉子の派手な紅梅色の訪問服に何となく恨みっぽい視線を投げていた。

それは茉莉子が高校を卒業した年にそろそろ縁談のあることも考えに入れてこしらえた和服の晴れ着だったが、短期大学を出るとすぐ、茉莉子はアメリカのさる財団の奨学資金の資格審査にパスして、シカゴに近い有名な大学へ入るために海を越えて行ってしまった。茉莉子を羽田に送る一群の中には今日結婚式を挙げる従妹^{いとこ}の由利子もいたし、花婿の加島一郎もいた。彼らは茉莉子の兄の精一をリーダーにするスキーヤーのグループでもあって、早坂一家とは格別親しかったのだが、その中の花形は誰がみても茉莉子で、加島一郎は最

も熱心な茉莉子の崇拜者だった。

「あの人が由利さんと結婚するなんて思いがけなかったわ。やっぱり離れていては駄目なのよ。もう四年だもの……」

節子は紅梅色のはなやかな着物に語りかけるようにつぶやいたが、偶然隣の元衛も妻のつぶやきと同じようなことを考えていたのか、

「由利子は茉莉子と同じ年だったかな」

と声をかけてきた。

「いいえ、由利子さんは茉莉子より二つ下ですわ」

「じゃ数え年の二十四か……まだ若いんだね」

「でも由利子さんのお母さんはもう去年あたりから、嫁よめき後おれると大変だって大騒ぎしていらしたんですもの……皆、年下のお嬢さんが片づいてしまうんで、私、茉莉子のことを考えると時々ほんとうに心配になりますの」

節子はこんな話の間にも、茉莉子をアメリカの大学へやることに反対した四年前の記憶を心に泛うかべている。自分達に無断で、奨学資金の資格審査を受け、合格してきてしまった娘を一向きに止めたのは母の節子だったのだ。普段、家長権を極限まで行使して、精一にも茉莉子にも煙たがられている元衛が、その時ばかりは茉莉子に味方して、若い時に外国を見て来ることは勉強以外にも一生を処する点に利益が多い。せっかく試験にパスしたも

のならアメリカへ行つて、日本の女性の能力を示してくることに私は賛成するとはつきり言いきつたのに、節子は意外な思いをしたものである。

幸いレークサイド大学に入学して以来、茉莉子は父親の期待を裏切らず成績も優秀、健康にも恵まれて四年の学生生活を躓きなしにおし切つて、今年の六月には大学院を出て修士号を授けられることになっている。この秋には間違ひなく帰朝する筈だから、節子にしてみれば、一人娘を外国に手離して、文字通り一日千秋の思いで待ちつづけてきたこの年月の不安も淋しさも、もう半年さきには、それに数倍する喜びになって返されてくる筈なのであるが、そうなつてみると、今度は四年の間に、茉莉子自身がどんな風に変化しているか、外国人の間の生活に慣れた茉莉子にはかえつて、日本での適当な結婚相手が見つかりにくいのではあるまいかなどと、取越し苦労があとからあとから、頭をもたげてくるのである。

クツクツと咳きのような元衛のふくみ笑いの声が着物を着かけている節子の耳に聞えてきた。

「何を笑つていらつしやるんです」

節子は姿見の前で褌を揃えながら咎めるようにして言つた。

「また、お前の愚痴がはじまったからだよ。女はオールドミスになると、人の婚礼のある度にヒステリーを起すもんだが、お前は茉莉子の名代を務めているようなものだ」

「まさか、ヒステリーなんか起しませんわ」

節子は苦笑しながら言ったが、何となしにこの数日の意味もなく苛々した気分はたしかに、元衛の言うように、加島と由利子の結婚につながっていたようである。こんな女の心の細かい變に気づくような元衛ではなかった筈だが、やっぱり最近高血圧を医者に注意されて、家にぶらぶらして暮らすことが多くなっただけ、元衛の心にも妻の気分が微妙に明暗を織りなすように變ってきたのだろうか。

間もなく、精一と藍子の夫婦が迎えに来たので、節子はパートタイムの家政婦にあとを頼んで、明るい色の自家用車に乗り込んだ。

運転は精一で、金茶色のタフタのカクテル・ドレスを着た藍子はその横の助手席に仲よく並んで坐っていた。

「今日は智美ちゃんは……お祖母ちゃんのところ？」

と節子がきくと、長い髪を頬のまわりになびかせた藍子は、首だけうしろへねじ向けて、「ベビー？ ええ、お隣へ預けて来ましたわ、ママは甘くするから、子供の教育には余りよくないけど……仕方ないわねえ」

と終りの半分は精一の方へ向けて言った。精一はハンドルを握ったまま軽くなずいてみせただけである。

「そんな勝手なことを言って……二人で出歩く時にはお祖父さまお祖母さまにおしつけて

おいて……悪いじゃありませんか」

節子も身体を浮せて運転席の二人の方へ上身を近よせながら笑ってみせた。精一は先妻の子で、節子は継母になるわけだが、元衛がきびしい一方の父親なのに、節子が仲をとりなしていたし、実子の茉莉子とわけ隔てなく面倒をみて育てたので、精一は若くて美しい節子を姉のように慕っていた。藍子と結婚したあとでも、愛情は薄れないで、折々藍子に、「あんた、ラシーヌの『フェードル』の息子みたいだわ」

とからかわれるほどである。藍子は精一の勤めさきの銀行の副頭取の一人娘だから、結婚以来精一は東野邸の一角に建て増した家に住まうようになって、半分は養子に取られた形になっている。実子でないだけに、そういう息子の離れて行き方には節子は不快を感じないで、かえって同じ家にいなくなつてからの精一の自分達への誠実な心配りに感謝していた。

「お母さん、茉莉子は帰つて来ても当分結婚しないなんて言わないでしようね」

精一が前方に眼を向けたまま、声をかけたので、節子ははつとした。精一も加島と由利子との結婚式に茉莉子のことを思いあわせているのだと思うと、肉身らしい愛情が感じられてうれしかった。

「どうですかね。茉莉子は変りものだから……昔っからのあなたのお友達の中に入って山登りだスキーだって騒いでいた時分でも、男の人なんて特別に感じたことないって言つて

いたじゃないの」

「そりゃ昔はそうだったし、アメリカで学生生活している中は女臭くない方がいいわけだけど、帰って来るとなると、いい頃に結婚した方が僕はいいと思うな」

「私も勿論その意見なのよ。あんたからも手紙の序によく言っておいて下さいよ」

「でも茉莉子さんはマスター・オブ・アーツなんでしょう。私達と違って生活力十分なんだから、そんなに結婚をお急ぎにならないでもいいわ」

年の若い藍子はまだ逢ったことのない義妹をいろいろに想像してみるらしく、夫と義母の顔を見較べながら言った。

「いや、そうでないよ。まだまだ日本の社会では女が能力を生かして生きるのには予想以上の努力が要るもの……自分の仕事をしていくにしても、いい伴侶ならある方がいいにきまっているよ。ねえ、お母さん、僕は加島も茉莉子にはいい相手だと思っていただけ……」

「まあ、厭よ。精一さん、……結婚の御披露にお招ばれていて……そんなこと言う人ありますか」

節子は藍子の手前を気にして、たしなめるように言った。

「でも加島さん、少し坊やすぎるんじゃない？」

藍子は思いの外ませた言い方をして、精一を見た。

「私、曾根さんの方がいいと思うわ。あの方S大の言語学の助教授でとても優秀なんですよ。茉莉子さんとならきつとお話があうわよ。それに、一昨年アメリカへ行った時にも茉莉子さんに逢つて来ているんですよ」

「そう、曾根が独身でいるのには、茉莉子のことか頭にあると僕は思っているですよ。しかしあいつだって、結婚の話はいくらもあるだろうし、秋までおとなしく待つてるかどうか解らないものね」

「曾根さんなら私はもう言いぶんなしだけれど……茉莉子は何と思っているかわからないわ」

「一度、僕から曾根にきいてみましょうか、お母さん」

「だって、精一さん、茉莉子さんが不承知だったらどうするのよ」

と藍子が口を入れた。

「いや、茉莉子も嫌いじゃないんだよ。レークサイドで曾根に逢ったあと、印象を書いて寄こした手紙で僕はそれを感じたよ」

「あながち、まあ、曾根さんときまったことじゃないけれど、お父さまも去年の病氣以来何となく弱っていられるしね。茉莉子も帰って来たら、何とか身を決めて貰いたいのが私の願いですよ」

節子が運転席に両手をかけてしみじみ言った時、自動車は竹を沢山植えた椿山荘の前庭

に静かに滑り込んでいた。

披露宴の乾盃が終つて、新婚旅行に旅立つ新郎新婦が着換えに行つたあと、客たちは広い芝生のスロープに配置されたテーブルを囲んだり、あたりをそぞろ歩きしたりして語りあつていた。晴れた空に常緑樹のみどりが冴々して早春の冷たい空気が快く男客の酔いのある頬にふれた。節子も義理の姪に当る由利子のために、両親と一緒に客のとり持ち役を勤めていたが、こんな間にも何人かの婦人客から茉莉子の話をしかけられた。

「今年、レークサイドを御卒業になるんですってね、秀才でいらっしゃるのね」

「でも、ちつともつんとしたところのない、可愛らしい方よ。お母さまに似ていらっしゃるの」

「あら、じゃ、美人でしょ」

「ええ、勿論ですわ」

などという会話にとり囲まれていると、節子は眩しいような……同時に底冷たい一種の孤独感を味わうのである。茉莉子を讃めそやす婦人達はきつと節子から離れた場所では「そういうお嬢さんは結婚の相手は案外少ないものよ」「アメリカの大学を出たお嫁さんなんて、万事にお高くてうちの息子なんかにはとても合いいくないわ」「理想も高いでしょうし、縁遠くなるわね」などと、私語き交わす言葉がひそめた息使いまで濃やかに聞きとれ

るようである。

「小母さま、しばらくでした。お元気ですか」

婦人客の群れを離れて、一人高見に立って、雪崩^{なだ}れ降る丘陵の傾斜をぼんやり見入っていた節子は、その声にふり向いて、そこに曾根安彦の立っている姿を見た。さつき披露宴の時、大分離れた精一達のテーブルにいる曾根をちらりとみかけたのだが、そのあと客の接待に逐^おわれて忘れともなく忘れていた。

「ごきげんよう……曾根さん、少しお太りになったようね。西洋から帰っていらした時より御丈夫そうに見えるわ」

節子はのびのびした曾根の長身を快く眺めて、微笑^{ほほえ}みながら言った。

「ありがとうございます。まあ、貧乏暇なしってとこですね。でも、暮から正月にかけては五色の方へスキーに行つて来ました」

「まあそうですか、茉莉子もスキーにはよく御一緒しましたわね。あっちでもスキー場はあるそうですけど、アメリカの人はあんまり好きではないんですってね……」

「やっぱりアメリカには山が尠いせいでしょうね。茉莉子さんはクリスチャニアまで来るんだから大したもんですよ。今精一さんに承つたら、この秋はいよいよお帰りですってね」

「ええ、六月に卒業しますから、まあ、その筈ですの……早く帰つて来てくれなければ私

たちの方が困りますわ」

言いながら、節子は茉莉子と曾根との間に最近手紙の往復のないらしいのを淋しく思った。

「僕がレークサイドをお訪ねした時まではよく時々手紙を下さったのですけれども……この頃はさっぱりお便りがないんです」

曾根も薄い頬に微笑を絶やさないままに言った。

「茉莉子さんは僕を失礼な奴だと思っていられるのかも知れません」

「まあ、何故でございましょう」

「僕がヨーロッパへ行ってから、茉莉子さんが、学校へ出した論文の写しを送って来て下さったことがあるんです。僕はその論旨にちょっとした批評を書いて返事を出したんですけど、茉莉子さんは勝気だから気に入らなかつたらしいんですね」

「わがままなところのある子ですから……批評していただければ張合いがあつてよろしいでしょうに……」

「いや、僕も言いすぎた点があつたかも知れないんです。ともかく、それ以来、一、二度、お便りしても御返事が来ないので、ついこちらも筆不精になって……」

「そんな……あなたに対して、気を悪くしているなんて、そんな筈はありませんわ。今度出す手紙に私からも申してやりましょう」

「そうして下さると有難いですね」

曾根は素直に言った。

「僕は茉莉子さんのこと、つい色々気になるもんだから、余計なおせっかいも言ったんですけど……怒られているとすると淋しいですから……」

「怒ってなんかいる筈ありませんわ。曾根さんはそんな角のあることをおっしゃる方ではありませんもの……」

「いいえ、小母さま、それは大違いです。僕はこう見えて頑固なところのある人間ですから……」

曾根が茉莉子の論文のどういう点を批判したのか、節子はききたいように思ったが、その時、明るい色の背広と真白なスーツの胸に深紅の薔薇をさした新郎新婦が芝生へ歩み出て来て別れの挨拶をはじめたので、客の群れは一せいに彼らを送るために車寄せの方へ歩き出した。

節子も由利子の母と並んで二人を乗せた自動車の滑り出すまで見送ったあと、時計をみるともう五時半過ぎているので、精一を急がせて、あわてて自動車へ乗った。

「お母さん、曾根と話していましたね」

と精一がハンドルを動かしながら言った。

「彼、何か茉莉子のことを言っていましたか」